石川さん連載（続）

連載２回目は「衝撃の日」である。今でも、あの日を思い出すと心が痛む。私の知らなかったことも書かれており、あらためて衝撃をうけている。あの「事件」後に、私がどう行動したかを記しておきたい。昨年８月にもレポートしたが、その時は「事件」のことをどこまで書いてよいか迷った。

未完の論文 2

ある社会学者の死

衝撃の日

夫が「死に神」に見えた

その日、名古屋市立大教授の石川洋明は仕事を終え、午後七時すぎに名古屋市天白区の団地内の自宅に帰った。目に飛び込んできたのが、妻＝当時(五一)＝の異変。台所で包丁を首に当て、自殺を図ろうとしていた。慌てて包丁を取り上げ、一一九番した。子ども部屋では、息絶えた小学校六年の長男＝当時(一二)＝が寝かされ、顔にハンカチがかぶせられていた。睡眠薬で長男を眠らせ、金属バットで殴り、首を絞めての犯行だった。二〇一二年九月十四日のことだ。

妻は、長男の出産直後にうつ病を発症。治療を続けながら、家事、育児に励んできた。

長男と一緒に「サルちゃん踊り」というダンスを考え、中日ドラゴンズが勝った日には一緒に踊るなど、愛情豊かな母親だった。長男は勉強好きで、優秀な成績だった。

しかし、末期がんの夫がやせ細り、あごの骨が壊死して歯が抜けていく姿に、妻は夫の死を間近に感じ、病状が悪化した。事件前の数カ月間は床に伏すことが多かった。

裁判での石川の証言に、妻の追い詰められていた状態がうかがえる。

事件の十一日前には「死にたい、電話ください」とメール。石川が慌てて家に帰ると、妻は主治医から入院を勧められたことを明かした。しかし、石川の体調は難しいね」という結論になった。このとき、一家心中を持ち掛ける妻を石川は懸命に止めた。

一家は、引っ越しを控えていた。「母子家庭になってから借家のままでは不安」という妻の希望で、近くの中古マンションを購入したのだ。事件の二日前、内装業者との打ち合わせがあり、妻は「片付けなきや」と焦って不安定になった。掃除を引き受けた石川も、貧血から途中で動けなくなった。その姿に「ごめんね、ごめんね」と、妻は取りつかれたように繰り返し、妻は「やせて、マスをしている夫が死に神に見えて、怖かった」と供述した。裁判では「息子に死に神が乗り移ったので、追い出そうと思った」とも語っている。

石川は、精神分析や臨床心理学にも詳しい社会学者。がん発症後は、学内で定期的にカウンセリングを受けており「事件前は、奥さんの病気への対処が、話の中心でした。いつも自身の病状よりご家族のことを気に掛けていました」と、精神科教授の明智龍男(五6)。

危機的状況は十分に感じていたはずだが、結果的に対応が遅れてしまった。

（敬称略）

＝つづく

のち、がん治療の[illegible]せた＝2012年1月、名古屋市立大で

なるべく目を合わさないように「聞き役」に徹した。じつは「事件」を報じた新聞の切り抜きコピーを持って行った。彼に見せるかどうか迷ったが、話題がメディア・新聞のことになり、コピーを見せた。「事件」後、新聞はほとんど読んでいないようで、コピーをじっくりと読んでくれた。「反応」が気になったが、彼らしく、こんな報道をされていたのかと平然と？していた。

衝撃的な「事件」翌日の朝刊、夕刊で多くの記事が出た。ネットではもっと早く、センセーショナルに。前から新聞に関心をもち、新聞「マスコミ評」を執筆している者として黙ってはいられなかった。新聞各紙のなかでも、朝日新聞の第１報では父親が事件の「主役」のような書き方がなされ、直接には関係ない大学の学部・学科・専門まで記載されていた。

亡くなった息子さんの葬儀後、石川さんの研究室を訪ねた。それまでは用件がある時をのぞき、こちらから出向くことはあまりなかった。とにかく彼のことが気になり、少しでもなにか「役」に立てないかと考えた。突然の訪問を喜んでくれたようで、彼は涙ながらに話し始めた。

石川さんだけでなく、大学として「問題」にすべきと動いたが、結局は私が「質問状」を送ることになった。この顛末はぼやかし気味に、『ジャーナリスト』2012 年 12 月号に寄稿し、拙著『災後の新聞』91 ページに掲載してある。石川さんが私の「行動」を喜んでくれたことだけは「救い」であった。

（2015 年 2 月 14 日）